

# 熊本県牛深市における「牛深ハイヤ祭り」と<ハイヤ>の展開

A Case Study on the Development of "USHIBUKA HAIYA Festival" and "HAIYA" in Ushibuka, Kumamoto

千住 一<sup>\*</sup>、辻原 万規彦<sup>\*\*</sup>、加藤 浩司<sup>\*\*\*</sup>、小林 泉<sup>\*\*\*\*</sup>  
SENJU Hajime<sup>\*</sup>, TSUJIHARA Makihiko<sup>\*\*</sup>, KATO Koji<sup>\*\*\*</sup>, KOBAYASHI Izumi<sup>\*\*\*\*</sup>

本報告は、熊本県牛深市において開催されている「牛深ハイヤ祭り」を取り上げ、まず、近年における祭りそのものの展開過程に関して、祭りの運営組織の複雑化や大規模化、祭りの日程拡大という視点から整理する。それと並行して、こうした祭りをめぐる動向のなかで、祭りにおいて演じられる「ハイヤ節」や「ハイヤ踊り」が、いかなる「あり方」を見せるに至っているのかを素描する。そして最後に、2006年3月に牛深市が迎える予定の市町合併に着目し、そうした政治的情勢を背景に、<ハイヤ>がいかなる役割を果たそうとしているのかについて、簡単に考察する。

キーワード：祭りの歴史の変遷、祭りと行政の関わり、ハイヤ祭り前夜祭、ハイヤ節全国大会

## 1. はじめに

熊本県牛深市は、熊本市の中心から直線距離にして約90km南西に位置し、天草下島の南端部分一帯を占める。一般的に、牛深では、古来より漁業が盛んに行われていたことから、牛深港を中心に「ハイヤ節」と呼ばれる漁師唄が広く流通、定着し、それにあわせて「ハイヤ踊り」が踊られるようになったと言われている。本報告が取り上げる「牛深ハイヤ祭り」(以下、ハイヤ祭り)とは、このハイヤ節とハイヤ踊りを中心に据えて、基本的に毎年4月の第3金曜、土曜、日曜に牛深市の中心地で行われる、牛深市主導の催し物のことである。

本報告の目的は、このハイヤ祭りを事例として、祭りそのものの変遷過程のみならず、祭りをめぐる動向のなかで、そこで演じられるハイヤ節やハイヤ踊りがいかなる展開を見せているのかについて指摘することにある<sup>(1)</sup>。なお、本報告では、ハイヤ節とハイヤ踊りを明確に区別して言及することが困難な場合に限り、便宜的に、<ハイヤ>という表記を用いることとする。

## 2. ハイヤ祭りの歴史の変遷

ハイヤ祭りの歴史の展開は、芦田徹郎によって明らかにされている。そこでまず、祭りの変遷について整理しておく(芦田1987:6-29)、その原点は、戦前から続く、戦没者慰霊祭的性格が強い「招魂祭」にあるという。そして、1948年には、1946年に発生した大火

からの復興に関連して、相撲、野球、柔道などのスポーツ大会や「仮装行列」を主な出し物とする「みなと祭り」が開催される。以降、しばらくは招魂祭とみなと祭りが併存していたが、これら2つの祭りは、1961年にみなと祭りに一本化されている。

しかし、こうした祭りの歴史のなかで、<ハイヤ>が演じられていた形跡はなく、初めて祭りに<ハイヤ>が登場するのは、1962年のことである。その後、数年間は、仮装行列が依然としてみなと祭りの中心的位置を占めていたものの、1965年頃から、「道中踊り」あるいは「道行き」と呼ばれる、町中での<ハイヤ>の上演が祭りの中心となり始める。そして、1972年に、みなと祭りは「牛深ハイヤ祭り」へと名称を変更する。

さて、現在のハイヤ祭りの中心は、上記した「道中踊り」を母体とする、各団体が<ハイヤ>を演じながら牛深の町中を練り歩く「ハイヤ総踊り」にある。つまり、以上で整理した祭りの経緯から、ハイヤ祭りという名称を含む今日におけるハイヤ祭りの姿が、ここ30~40年のうちに形成されたものであることが分かる。

## 3. ハイヤ祭りと行政の関わり<sup>(2)</sup>

芦田は、1986年に開催されたハイヤ祭りを取り上げ、祭りが実施に至るまでの経緯および祭りの実態について詳細に記録している(芦田1987:56-68)。以下、芦田が明らかにした1986年のハイヤ祭りに関わる事象

\* 立教大学大学院 観光学研究科 / 熊本県立大学 環境共生学部 研究支援センター 研究員

\*\* 熊本県立大学 環境共生学部 \*\*\* 有明工業高等専門学校 建築学科 \*\*\*\* 立教大学 観光学部 学部生

と、2004年8月に報告者が実施した現地調査によって明らかになった、近年のハイヤ祭りの動向を比較する。

まず、祭りの運営形態から見ていくと、1986年に実施されたハイヤ祭りは、「牛深ハイヤ祭り実行委員会」(以下、実行委員会)が主催している。この実行委員会は、市長が委員長を務め、以下、3名の副委員長(商工会議所会頭、観光協会副会長<sup>(3)</sup>、市議会会長)、3名の事務局(市総務課長、商工会議所専務、市商工観光課長)、40名の実行委員、10名の「ハイヤ祭り企画委員会」(以下、企画委員会)という構成になっている。

2004年4月に開催された第33回ハイヤ祭りも、1986年と同様、実行委員会が祭りの主催者となっているが、実行委員会内に「各実行部会」という組織が追加されている点で、1986年のそれとは異なる。この組織は、ハイヤ祭りの各構成部分を市役所各課の担当とすることを目的に、2003年実施のハイヤ祭りのための実行委員会から新設されたものであるという。例えば、ハイヤ総踊りは商工観光課以下計7の、駐車場整理は土木課以下計5の、総合案内所は財政課以下計4の部署がそれぞれ運営を担当している(2003年2月現在)。

続いて、2003年2月現在の実行委員会の全体像を確認しておく。市長による委員長以下、副委員長6名(助役、商工会議所会頭、市議会議長、牛深市漁協長、JAあまくさ牛深統括支所長、観光協会副会長)、事務局3名(市商工観光課長、商工会議所局長、市秘書企画課長)、市の行政関係者を中心とした実行委員44名、企画委員32名、10の実行部会で構成されている<sup>(4)</sup>。

このように、ハイヤ祭りは、牛深市と市の商工会議所を中心とした実行委員会によって主催されているわけであるが、こうした構造は、祭り関係の予算からも読み取ることができよう。例えば、2004年開催のハイヤ祭りは、祭り全体の経費約1800万円のうち、市が1580万円を、その差額を商工会議所がそれぞれ負担し

ている。このハイヤ祭りに対する市による補助は、「ハイヤ祭り委託料」という項目で、商工費の一部として市の一般会計に計上されており、その額は近年において微増微減を繰り返している(表-1参照)。

以上、ハイヤ祭りと行政の関わりについて整理することにより、行政主導型という祭りの特徴を再確認することができた。ところで、芦田によると、ハイヤ祭りの前身であるみなと祭りは、牛深市および市の商工会議所による共催であったという(芦田1987:15)。つまり、現在のハイヤ祭りは、みなと祭りの企画、運営体系を受け継いでいると言え、さらに、実行委員会の変遷からも明らかのように、近年においてその組織形態は複雑化、大規模化している。そして、2003年に新設された各実行部会のあり方は、市役所全体でハイヤ祭りの企画および運営に取り組んでいるという姿勢を、より明確にしていよう。

#### 4. ハイヤ祭り前夜祭の登場<sup>(5)</sup>

次に、ハイヤ祭りそのものの拡大過程について指摘したい。芦田が取り上げた1986年のハイヤ祭りは、4月19日(土)20日(日)の2日間にわたって開催されているが、2004年のそれは、4月16日(金)17日(土)18日(日)の3日間という日程で実施されている。つまり、1986年以降、いずれかの時点で祭りの日程が2日間から3日間に拡大したことになる。

ハイヤ祭りの日程が初めて3日間に拡大したのは、1997年のことであった。この年、「第3回全国ハイヤミット」が牛深で開催されることとなり、これが4月19日(土)20日(日)に実施されるハイヤ祭りの前夜祭として、前日の18日(金)に企画されたのである。全国ハイヤサミットとは、全国に点在するハイヤ系民謡の関係者が一同に介する会合のことであるが、ここで、牛深のハイヤ節とそれらハイヤ系民謡の関係について

表-1 ハイヤ祭りに関わる牛深市の予算内訳

(単位：千円)

	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年
牛深市一般会計予算額	11,340,523	10,651,694	10,671,177	10,037,246	9,439,464	8,639,604
商工費予算額	461,205	263,911	220,136	178,276	159,457	132,371
ハイヤ祭り委託料	14,500	13,500	14,500	13,000	15,000	15,800
ハイヤ節全国大会委託料	-	-	-	1,450	1,650	1,800

注：2004年のデータに関しては、6月補正までの予算額にもとづく。その他は最終予算額を計上。

出所：牛深市役所財政課提供の資料より転載

確認しておく必要がある。

芦田によると、1965年に、民謡研究家の町田佳馨とその弟子である竹内勉によって、牛深のハイヤ節が、全国各地に存在するハイヤ系民謡の「起源」であることが「認定」されたという<sup>(6)</sup>。つまり、これにより、牛深は、日本全国のハイヤ系民謡の「発祥の地」という位置付けを獲得したのである(芦田1987:19-21)<sup>(7)</sup>。

こうした経緯から、1997年に全国ハイヤサミットの第3回大会が牛深で開催されることになったわけであるが<sup>(8)</sup>、当日は、「ハイヤの魅力を探る」というテーマの下、前述した竹内勉による講演、関係者によるパネルディスカッションなどが行われている<sup>(9)</sup>。

そして、この年以降、ハイヤ祭り前夜祭開催が恒常化し、祭りの日程が、従来の土曜日と日曜日の2日間から、前日の金曜日の前夜祭を加えた計3日間へと拡大したのである。しかし、前夜祭としてハイヤサミットを毎年開催していたわけではもちろんなく、「輝けハイヤの競演」(以下、ハイヤの競演)なるイベントが、1998年から新たに金曜日に実施されることとなった。

2004年で7回目の開催を迎えたこのハイヤの競演の目的は、<ハイヤ>を舞台の上で演じることにあるのだという。ハイヤ祭りの中心イベントであるハイヤ総踊りが、<ハイヤ>を演じながら町中を練り歩くというものであるのに対し、ハイヤの競演は、「牛深市総合センター」という市の施設の「大ホール」で行われ、2004年には計8団体が<ハイヤ>を演じている。つまり、ハイヤの競演の登場および継続的な実施は、ハイヤ祭りの日程拡大を定着化させただけでなく、祭りのなかで<ハイヤ>が演じられる場所という観点において、「屋内/屋外」という対立軸を生み出すに至ったのである。

## 5. ハイヤ節全国大会の派生

さて、ハイヤ祭りの拡大過程を論じるにあたり、「ハイヤ節全国大会」(以下、全国大会)の存在を看過することはできない。全国大会とは、年齢、性別を問わず一般人から参加者を募集し、そのハイヤ節の腕前を競い合うというものであり、第1回全国大会は、ハイヤ祭りの30回開催を記念し、2001年4月20日(金)から22日(日)に実施されたハイヤ祭りの一プログラムとして、祭りの最終日に行われている。

その後、全国大会は継続実施され、2004年で4回目の開催を迎えたが、2002年の2回目以降は、ハイヤ祭りとは日程を異にし、毎年6月下旬の週末開催となっ

ている。また、1回目は予選および決勝を1日で済ませていたのに対し、2回目以降は、土曜日に予選を行い、日曜日に決勝を行うという日程を組んでいる。このように、全国大会はハイヤ祭りから日程的に完全に独立したかたちをとっているものの、ハイヤ祭りを主導する牛深市としては、4月のハイヤ祭りとは6月の全国大会という2つの催し物を以て「ハイヤ祭り」とする、との立場であるという。

また、先に、予算の面からハイヤ祭りと行政の関係について指摘したが、この全国大会に関しても、単独開催となった2002年からは、「ハイヤ節全国大会委託料」という項目で、市の一般会計より予算が拠出されている(表-1参照)。

以上が全国大会の概略であるが、ハイヤ祭りから全国大会が派生したという動向から、祭りの規模の拡大傾向を指摘することは容易い。むしろここでは、ハイヤ節のための大会、という全国大会の性格に着目すべきであろう。つまり、全国大会が4月のハイヤ祭りとは別途に開催され、それが定着化しているという状況は、ハイヤ祭りで演じられる<ハイヤ>から、ハイヤ節が分離していっていることを意味するのである<sup>(10)</sup>。

そして、こうした<ハイヤ>をめぐる展開の背景には、先に触れたような、牛深のハイヤ節が全国各地に点在するハイヤ系民謡の「起源」である、という見解が介在していると言えよう。例えば、2004年6月26日(土)27日(日)に開催された第4回全国大会のパンフレットの表紙は、その端的な証左たり得る。すなわち、ハイヤ節に関する一連の「認定」作業を行った町田は、牛深市に対して、自筆で「ハイヤハンヤは何処でもやるが、牛深ハイヤは元ハイヤ」と記した色紙を贈っているが、その色紙が大会パンフレットの表紙の一部として使用されているのである。

## 6. おわりに

ここまで、熊本県牛深市におけるハイヤ祭りを事例として、行政主導型という祭りの特徴を再確認し、主催者である実行委員会組織の近年における複雑化、大規模化を指摘した。そして、前夜祭の登場および全国大会の派生に着目し、ここ数年間のハイヤ祭りそのものの拡大過程を明らかにしつつ、そこで演じられる<ハイヤ>をめぐる状況について言及した。

言うまでもなく、本報告は、単にハイヤ祭りの行政依存体質を指摘するものではない<sup>(11)</sup>。どちらかと言う

と、そうした祭りの性格を前提とし、行政主導型の祭りという「場」のなかで、その地域の「伝統文化」や「民俗芸能」といったものが、いかなる「あり方」を見せるに至っているのか、という点を素描することに力点を置いたつもりである。

さて、みなと祭りがハイヤ祭りに改称されたことから分かる通り、現在の牛深において、<ハイヤ>に関する事象は、一種の「象徴」として機能している。例えば、1997年8月に完成した橋は「牛深ハイヤ大橋」と名付けられ、牛深市が発行するパンフレットや公刊物の表紙には、ハイヤ祭りにおける<ハイヤ>の様子や、ハイヤ大橋の図像が数多く使用されている。芦田は、こうした傾向を「コミュニティ・アイデンティティ」という視点から説明しているが(芦田 2000:13-15)、こうした視点と本報告で見たような<ハイヤ>の動向の接合を試みるのが、今後の課題のひとつであろう。

そして、2006年3月には、牛深市を含む2市8町が合併し、「天草市」が発足する予定である。この合併には、牛深の北に位置する本渡市も参加する予定であるが、本渡は、「天草ハイヤ踊りの競演」、「天草ハイヤ前夜祭」、「天草ハイヤ道中総踊り」といった催し物を擁し、2004年8月に「本渡夏まつり」を実施している。牛深が、ハイヤ系民謡発祥の地という見解を積極的に利用している点については詳述したが、こうした動向は、将来的な合併を見越して本渡が行った、<ハイヤ>の「所有権」をめぐる行動の一端であると解釈し得る。

つまり、市町合併という政治的情勢を背景とし、<ハイヤ>は、これまでの牛深市という行政単位から抜け出し、天草市というより広く新しい政治的枠組みのなかに取り込まれようとしているのである。こうした<ハイヤ>をめぐる動向に注意しながら、さらなる調査、研究を進めていくこともまた、求められている。

**謝辞:** 2004年8月に報告者が牛深市において実施した調査では、突然の訪問がほとんどであったにもかかわらず、実に多くの方々から快く聞き取りに応じて下さり、多数の有益な資料を提供して下さいました。また、甲南女子大学の芦田徹郎先生からは、本報告でたびたび言及した、示唆に富む大変貴重な研究成果を賜った。そして、本報告は、平成15~16年度熊本県立大学地域貢献研究事業(研究課題:「島」の地域特性:資源と産業振興について)、研究代表者:辻原万規彦)による研究成果の一部である。この場を借りて、関係者の方々に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

#### 【補注】

- (1) 断りが無い限り、本報告で示すデータは、2004年8月に実施した現地調査において、報告者が収集したものである。
- (2) 本章の内容は、牛深市役所商工観光課での聞き取り調査に大きく依拠している。
- (3) 市長が観光協会会長を兼任していたため、副会長が実行委員会の副委員長を務めた(芦田 1987:56)。
- (4) 2004年開催のハイヤ祭りの場合、実施に際して、企画委員会は計5回の会議を、実行部会は部会毎に打合せを、実行委員会は2004年2月に1回の会合を、それぞれ行っている。
- (5) 本章および第5章の内容は、牛深市教育委員会生涯教育課での聞き取り調査に大きく依拠している。
- (6) ハイヤ系民謡とは、一般的に、「ハイヤエー」という歌い出しで始まる民謡のことを指す。牛深ハイヤ節に関する町田の見解については、町田(1967:117-142)を参照のこと。
- (7) 芦田は、みなと祭りがハイヤ祭りへと転換していく背景として、このハイヤ節に関する見解の他に、「牛深民謡保存会」による活動の存在を指摘している(芦田 1987:16, 21-25)。
- (8) 全国ハイヤミットは、第1回が1996年7月に佐渡で、第2回が同年10月に平戸で、それぞれ開催されている。
- (9) 第3回全国ハイヤミットの詳細については、広報うしぶか(1997)を参照のこと。
- (10) こうした潮流と類似の出来事として、ハイヤ節のみが、1992年12月に「牛深ハイヤ節」として市の無形民俗に指定されているという点を挙げることができよう。
- (11) この点については、牛深市自身が、十分に自覚的である。例えば、広報うしぶか(1988)。

#### 【参考文献】

- 芦田徹郎(1987):牛深市「ハイヤ祭り」の沿革と現状、昭和60年度熊本県開発研究センター(財)地域開発研究助成研究成果報告書
- 芦田徹郎(2000):ある高齢化都市の苦悩と元気 牛深市とハイヤをめぐる(「高齢社会における地域活性化の研究」平成9-11年度科学研究費補助(基盤研究B2)研究成果報告書、pp.3-24)
- 広報うしぶか(1988):全国に誇れる祭りだけど...8割が市の補助金、広報うしぶか、1988年12月号、p.5
- 広報うしぶか(1997):特集 ハイヤの魅力を探る、広報うしぶか、1997年6月号、pp.2-11
- 町田佳聲(1967):民謡源流考 「江差追分と佐渡おけさ」を採録するについて(東洋音楽会編「日本の民謡と民俗芸能」音楽之友社、pp.45-185)